

## 研究報告

# 及川全三の人間性とホームスパン取り組みへの契機

Oikawa Zenzo's Humanity and his Motivation to Work on Homespun Handicraft

菊池直子\*

Naoko KIKUCHI

**Keywords:** Oikawa Zenzo, Homespun, Handicraft, Jyunikabura village

及川全三, ホームスパン, 手工芸, 十二鎗村

## 1. はじめに

及川全三(1892~1985 年)は、農家の副業で作られていたホームスパンに美術的な価値を与え、工芸品にまで高めた人物である。大正末期に民芸運動を起こした柳宗悦に感化を受け、植物性染料による和紙と羊毛の染色、ホームスパンの製作と指導に尽力した人物として知られている。ホームスパン界に多大な功績を残したが、及川全三のホームスパンに注目した調査報告はあまりみられない。例えば、工藤<sup>1)</sup>は、柳宗悦との関わりの面から及川全三について報告しているが、ホームスパンに関しては、その契機に触れているのみである。湯口<sup>2)</sup>は、岩手におけるホームスパンの歴史や現状等を説明しているが、それらの流れの一部で及川全三の功績を述べているのみである。東和町先人顕彰誌<sup>3)</sup>では、及川全三の経歴やホームスパンに関することを説明しているが、出典や証言者等が明示されていないため検証が難しい。

一方、佐々木<sup>4)</sup>は、羊毛の利用方法に関する記事において岩手県のホームスパンを紹介し、及川全三の功績や著書<sup>5)</sup>、弟子の活躍等についても説明している。佐々木は、その末文で「及川氏の技術を受け継ぐ人がこうして現在もがんばっている一方で、いまだに彼の業績を評価するための資料の収集が全く行われていないことは、同じ県民として非常に残念なことです。」と述べ、調査研究の必要性を示唆した。

現在、及川全三が没してから 27 年が経過し、当時を語ることのできる人が少なくなり、事実を把握することは容易ではない。しかし、ホームスパンが継承されている岩手において、及川全三を調査することは意義深い。工芸品としてのホームスパンの原点に及川全三が存在するからである。本研究では、収集した文章資料や書簡、聞き取り証言をもとに、及川全三の人間性やホームスパン取り組みの契機等について検証した。

## 2. 調査方法

及川全三に関する文章資料や書簡を調査するとともに、

姪にあたる及川恵美子氏、当時の内弟子であった野呂(旧姓 糸賀)淑子氏、高橋(旧姓 鎌田)マサ子氏への聞き取り調査、および資料・所蔵品等の写真記録を行った。3 名への調査日は、次のとおりである。

- (1) 2011 年 6 月 9 日、16 日：及川恵美子氏(及川全三の兄の娘)
- (2) 2011 年 10 月 22 日：野呂淑子氏(1957(昭和 32)~1975(昭和 50)年の 18 年間住み込み)
- (3) 2012 年 6 月 12 日、19 日：高橋マサ子氏(1954(昭和 29)~1957(昭和 32)年の 3 年間住み込み)

及川全三の内弟子は、最初の福田ハレ(故人)から最後の野呂氏までの間に複数人いたことがわかっている。また、時折勉強に来る人や長期休暇を利用し勉強に来る学生など多数いたこともわかっている。しかし、故人となった人、連絡先や氏名が判明できなかった人が多く、本調査への協力が得られたのは 3 名であった。

また、2012 年 11 月 17 日に盛岡市先人記念館において、学芸員解説および講演を聴講し、民芸運動における及川全三の情報を収集した。

## 3. 経歴

図 1 は、ホームスパンのジャケット(上図)と部屋着(下図)を着用した及川全三である。撮影時の年齢は不明であるが、野呂氏が内弟子をしていた頃であり、70 歳代頃と推定される。部屋着は、深みのある赤茶色の緯糸を規則的に織り込んだ個性的な織り柄である。さらに、衿と前立て、袖口には、色違いの赤味の布地が用いられた洒落たデザインである。外出先で着用している様子により、部屋着とはいってもおしゃれなカジュアルウェアとし、形式張らないときに着用していたと考えられる。

図 2 は、及川全三の経歴が概観できる資料である。1985(昭和 60)年 10 月の葬儀で配付されたもので、表には『凌雲院全月孤照禅居士』の戒名が記されている。及川全三は、1892(明治 25)年 11 月 11 日に父・及川節郎と母・ミヤの 5 人兄弟の次男として生まれた。当時の住所は「岩

\* 生活科学科生活科学専攻

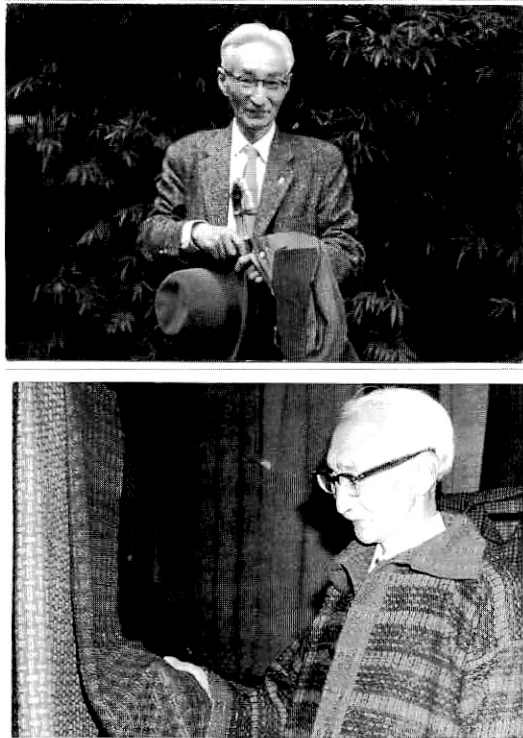


図1 及川全三（野呂淑子氏 所蔵）

手県和賀郡十二箇村大字安俵字沖二十一」である。及川全三の兄である及川優曹の回想録（及川恵美子氏 所蔵）には、子供の頃の様子が語られている。及川全三について「繪がすきで、よく水彩などを描いてゐたが、繪筆は着物のどこへでもぬつて拭いた。」と記されており、絵に興味をもっていた様子が語られていた。

及川全三は、図2の職歴のとおり、元来の教育者である。1916（大正5）年4月～1917（大正6）年3月の間に上京したことになるが、その理由について、工藤<sup>1)</sup>は「白樺運動の影響を受けてのことらしいと、全三の姪である野崎節子氏が平成になってから語るのを筆者は聞いているが、それが明確なものか、後になって考えるとそうも推察できる、というものははっきりしない。」と報告している。文中の野崎節子氏は、全三の妹の娘である。今回の聞き取り調査でも上京の理由が明確にできなかったが、絵を描くことを好む及川全三が、1910年代に近代の西洋美術を紹介した『白樺』から影響を受けたことは理解できる。

1927（昭和2）年3月に慶応義塾幼稚舎を辞職してから、ホームスパンに取り組むようになった経緯については、諸説がみられることにより、4で検証する。

及川全三が帰郷した日は、経歴に記載されていないが、

| 学歴            |                       | 職歴            |                         | 団体歴           |               | 表彰歴        |                              |
|---------------|-----------------------|---------------|-------------------------|---------------|---------------|------------|------------------------------|
| 大正三年三月三十一日    | 岩手県立師範学校本科第一部卒業       | 大正三年三月三十一日    | 盛岡市立城南尋常小学校訓導           | 昭和十一年八月二十日    | 和賀郡十二箇村議会議員   | 昭和十二年五月一日  | 和紙染色技術において農林大臣賞受賞            |
| 大正五年三月三十日     | 東京市下谷区西町尋常小学校訓導       | 大正五年三月三十日     | 東京府果樹町迎高西尋常小学校訓導        | 昭和十三年十一月三十日   | 和賀郡十二箇村農地委員   | 昭和十二年十一月一日 | 和紙及びホームスパン作品について日本民芸会会長賞受賞   |
| 大正六年三月三十日     | 慶応義塾幼稚舎教員             | 大正六年三月三十日     | 植物染料によるホームスパン及び和紙の製作に従事 | 昭和十五年四月二十日    | 農林省地方事情調査員    | 昭和十四年四月一日  | 産業振興の功績により東和町町勢功労者表彰受賞       |
| 大正八年三月三十日     | 三島学園女子短期大学講師（工芸科）     | 大正八年三月三十日     | 三島学園女子短期大学講師（工芸科）       | 昭和十六年五月二十日    | 和賀郡土沢町議会議員    | 昭和十四年四月一日  | 和紙及び染色技術において中小企業功労者として黄綬褒章受賞 |
| 大正九年三月三十日     | 向中野学園高校工芸科（染色・織り工芸）講師 | 大正九年三月三十日     |                         | 昭和十七年五月二十日    | 和賀郡土沢町長       | 昭和十四年四月一日  | 中小企業振興功労により勲五等瑞宝章受賞          |
| 大正十年三月三十日     |                       | 大正十年三月三十日     |                         | 昭和十八年五月二十日    | 国画会会員         | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正十一年三月三十日    |                       | 大正十一年三月三十日    |                         | 昭和十九年五月二十日    | 岩手県ホームスパン協会会長 | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正十三年三月三十日    |                       | 大正十三年三月三十日    |                         | 昭和二十年五月二十日    | 和賀郡東和町文化財専門委員 | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正十五年三月三十日    |                       | 大正十五年三月三十日    |                         | 昭和二十一年五月二十日   | 和賀郡東和町議会議員    | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正十七年三月三十日    |                       | 大正十七年三月三十日    |                         | 昭和二十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正十九年三月三十日    |                       | 大正十九年三月三十日    |                         | 昭和二十三年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二十一年三月三十日   |                       | 大正二十一年三月三十日   |                         | 昭和二十四年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二十三年三月三十日   |                       | 大正二十三年三月三十日   |                         | 昭和二十五年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二十五年三月三十日   |                       | 大正二十五年三月三十日   |                         | 昭和二十六年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二十七年三月三十日   |                       | 大正二十七年三月三十日   |                         | 昭和二十七年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二十九年三月三十日   |                       | 大正二十九年三月三十日   |                         | 昭和二十八年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正三十一年三月三十日   |                       | 大正三十一年三月三十日   |                         | 昭和二十九年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正三十三年三月三十日   |                       | 大正三十三年三月三十日   |                         | 昭和三十年五月二十日    |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正三十五年三月三十日   |                       | 大正三十五年三月三十日   |                         | 昭和三十一年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正三十七年三月三十日   |                       | 大正三十七年三月三十日   |                         | 昭和三十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正三十九年三月三十日   |                       | 大正三十九年三月三十日   |                         | 昭和三十三年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正四十一年三月三十日   |                       | 大正四十一年三月三十日   |                         | 昭和三十四年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正四十三年三月三十日   |                       | 大正四十三年三月三十日   |                         | 昭和三十五年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正四十五年三月三十日   |                       | 大正四十五年三月三十日   |                         | 昭和三十六年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正四十七年三月三十日   |                       | 大正四十七年三月三十日   |                         | 昭和三十七年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正四十九年三月三十日   |                       | 大正四十九年三月三十日   |                         | 昭和三十八年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正五十一年三月三十日   |                       | 大正五十一年三月三十日   |                         | 昭和三十九年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正五十三年三月三十日   |                       | 大正五十三年三月三十日   |                         | 昭和四十年五月二十日    |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正五十五年三月三十日   |                       | 大正五十五年三月三十日   |                         | 昭和四十一年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正五十七年三月三十日   |                       | 大正五十七年三月三十日   |                         | 昭和四十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正五十九年三月三十日   |                       | 大正五十九年三月三十日   |                         | 昭和四十三年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正六十一年三月三十日   |                       | 大正六十一年三月三十日   |                         | 昭和四十四年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正六十三年三月三十日   |                       | 大正六十三年三月三十日   |                         | 昭和四十五年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正六十五年三月三十日   |                       | 大正六十五年三月三十日   |                         | 昭和四十六年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正六十七年三月三十日   |                       | 大正六十七年三月三十日   |                         | 昭和四十七年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正六十九年三月三十日   |                       | 大正六十九年三月三十日   |                         | 昭和四十八年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正七十一年三月三十日   |                       | 大正七十一年三月三十日   |                         | 昭和四十九年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正七十二年三月三十日   |                       | 大正七十二年三月三十日   |                         | 昭和五十年五月二十日    |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正七十四年三月三十日   |                       | 大正七十四年三月三十日   |                         | 昭和五十一年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正七十六年三月三十日   |                       | 大正七十六年三月三十日   |                         | 昭和五十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正七十八年三月三十日   |                       | 大正七十八年三月三十日   |                         | 昭和五十三年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正八十年三月三十日    |                       | 大正八十年三月三十日    |                         | 昭和五十四年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正八十二年三月三十日   |                       | 大正八十二年三月三十日   |                         | 昭和五十五年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正八十四年三月三十日   |                       | 大正八十四年三月三十日   |                         | 昭和五十六年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正八十六年三月三十日   |                       | 大正八十六年三月三十日   |                         | 昭和五十七年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正八十八年三月三十日   |                       | 大正八十八年三月三十日   |                         | 昭和五十八年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正九十年三月三十日    |                       | 大正九十年三月三十日    |                         | 昭和五十九年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正九十二年三月三十日   |                       | 大正九十二年三月三十日   |                         | 昭和六十年五月二十日    |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正九十四年三月三十日   |                       | 大正九十四年三月三十日   |                         | 昭和六十一年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正九十六年三月三十日   |                       | 大正九十六年三月三十日   |                         | 昭和六十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正九十八年三月三十日   |                       | 大正九十八年三月三十日   |                         | 昭和六十三年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百年三月三十日    |                       | 大正一百年三月三十日    |                         | 昭和六十四年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百二年三月三十日   |                       | 大正一百二年三月三十日   |                         | 昭和六十五年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百四年三月三十日   |                       | 大正一百四年三月三十日   |                         | 昭和六十六年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百六年三月三十日   |                       | 大正一百六年三月三十日   |                         | 昭和六十七年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百十八年三月三十日  |                       | 大正一百十八年三月三十日  |                         | 昭和六十八年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百二十年三月三十日  |                       | 大正一百二十年三月三十日  |                         | 昭和六十九年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百二十二年三月三十日 |                       | 大正一百二十二年三月三十日 |                         | 昭和七十年五月二十日    |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百二十四年三月三十日 |                       | 大正一百二十四年三月三十日 |                         | 昭和七十一年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百二十六年三月三十日 |                       | 大正一百二十六年三月三十日 |                         | 昭和七十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百二十八年三月三十日 |                       | 大正一百二十八年三月三十日 |                         | 昭和七十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百三十年三月三十日  |                       | 大正一百三十年三月三十日  |                         | 昭和七十三年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百三十二年三月三十日 |                       | 大正一百三十二年三月三十日 |                         | 昭和七十四年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百三十四年三月三十日 |                       | 大正一百三十四年三月三十日 |                         | 昭和七十五年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百三十六年三月三十日 |                       | 大正一百三十六年三月三十日 |                         | 昭和七十六年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百三十八年三月三十日 |                       | 大正一百三十八年三月三十日 |                         | 昭和七十七年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百四十一年三月三十日 |                       | 大正一百四十一年三月三十日 |                         | 昭和七十八年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百四十二年三月三十日 |                       | 大正一百四十二年三月三十日 |                         | 昭和七十九年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百四十四年三月三十日 |                       | 大正一百四十四年三月三十日 |                         | 昭和八十年五月二十日    |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百四十六年三月三十日 |                       | 大正一百四十六年三月三十日 |                         | 昭和八十一年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百四十八年三月三十日 |                       | 大正一百四十八年三月三十日 |                         | 昭和八十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百五十年三月三十日  |                       | 大正一百五十年三月三十日  |                         | 昭和八十三年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百五十二年三月三十日 |                       | 大正一百五十二年三月三十日 |                         | 昭和八十四年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百五十四年三月三十日 |                       | 大正一百五十四年三月三十日 |                         | 昭和八十五年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百五十六年三月三十日 |                       | 大正一百五十六年三月三十日 |                         | 昭和八十六年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百五十八年三月三十日 |                       | 大正一百五十八年三月三十日 |                         | 昭和八十七年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百六十年三月三十日  |                       | 大正一百六十年三月三十日  |                         | 昭和八十八年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百六十二年三月三十日 |                       | 大正一百六十二年三月三十日 |                         | 昭和八十九年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百六十四年三月三十日 |                       | 大正一百六十四年三月三十日 |                         | 昭和九十年五月二十日    |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百六十六年三月三十日 |                       | 大正一百六十六年三月三十日 |                         | 昭和九十一年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百六十八年三月三十日 |                       | 大正一百六十八年三月三十日 |                         | 昭和九十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百七十年三月三十日  |                       | 大正一百七十年三月三十日  |                         | 昭和九十二年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百七十二年三月三十日 |                       | 大正一百七十二年三月三十日 |                         | 昭和九十四年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百七十四年三月三十日 |                       | 大正一百七十四年三月三十日 |                         | 昭和九十五年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百七十六年三月三十日 |                       | 大正一百七十六年三月三十日 |                         | 昭和九十六年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百七十八年三月三十日 |                       | 大正一百七十八年三月三十日 |                         | 昭和九十七年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百八十年三月三十日  |                       | 大正一百八十年三月三十日  |                         | 昭和九十八年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百八十二年三月三十日 |                       | 大正一百八十二年三月三十日 |                         | 昭和九十九年五月二十日   |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百八十四年三月三十日 |                       | 大正一百八十四年三月三十日 |                         | 昭和一百年五月二十日    |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百八十六年三月三十日 |                       | 大正一百八十六年三月三十日 |                         | 昭和一百零一年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百八十八年三月三十日 |                       | 大正一百八十八年三月三十日 |                         | 昭和一百零二年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百九十年三月三十日  |                       | 大正一百九十年三月三十日  |                         | 昭和一百零三年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百九十二年三月三十日 |                       | 大正一百九十二年三月三十日 |                         | 昭和一百零四年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百九十四年三月三十日 |                       | 大正一百九十四年三月三十日 |                         | 昭和一百零五年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百九十六年三月三十日 |                       | 大正一百九十六年三月三十日 |                         | 昭和一百零六年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正一百九十八年三月三十日 |                       | 大正一百九十八年三月三十日 |                         | 昭和一百零七年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百年三月三十日    |                       | 大正二百年三月三十日    |                         | 昭和一百零八年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百二年三月三十日   |                       | 大正二百二年三月三十日   |                         | 昭和一百零九年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百四年三月三十日   |                       | 大正二百四年三月三十日   |                         | 昭和一百一十年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百六年三月三十日   |                       | 大正二百六年三月三十日   |                         | 昭和一百一十一年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百八年三月三十日   |                       | 大正二百八年三月三十日   |                         | 昭和一百一十二年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十年三月三十日  |                       | 大正二百一十年三月三十日  |                         | 昭和一百一十三年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十二年三月三十日 |                       | 大正二百一十二年三月三十日 |                         | 昭和一百一十四年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十四年三月三十日 |                       | 大正二百一十四年三月三十日 |                         | 昭和一百一十五年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十六年三月三十日 |                       | 大正二百一十六年三月三十日 |                         | 昭和一百一十六年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十八年三月三十日 |                       | 大正二百一十八年三月三十日 |                         | 昭和一百一十七年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百二十年三月三十日  |                       | 大正二百二十年三月三十日  |                         | 昭和一百一十八年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十二年三月三十日 |                       | 大正二百一十二年三月三十日 |                         | 昭和一百一十九年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十四年三月三十日 |                       | 大正二百一十四年三月三十日 |                         | 昭和一百二十年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十六年三月三十日 |                       | 大正二百一十六年三月三十日 |                         | 昭和一百二十一年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十八年三月三十日 |                       | 大正二百一十八年三月三十日 |                         | 昭和一百二十二年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百二十年三月三十日  |                       | 大正二百二十年三月三十日  |                         | 昭和一百二十三年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十二年三月三十日 |                       | 大正二百一十二年三月三十日 |                         | 昭和一百二十四年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十四年三月三十日 |                       | 大正二百一十四年三月三十日 |                         | 昭和一百二十五年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十六年三月三十日 |                       | 大正二百一十六年三月三十日 |                         | 昭和一百二十六年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十八年三月三十日 |                       | 大正二百一十八年三月三十日 |                         | 昭和一百二十七年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百二十年三月三十日  |                       | 大正二百二十年三月三十日  |                         | 昭和一百二十八年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十二年三月三十日 |                       | 大正二百一十二年三月三十日 |                         | 昭和一百二十九年五月二十日 |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十四年三月三十日 |                       | 大正二百一十四年三月三十日 |                         | 昭和一百三十年五月二十日  |               | 昭和十四年四月一日  |                              |
| 大正二百一十六年三月三十日 |                       | 大正二百一十六年三月三十日 |                         | 昭和一百三十一       |               | 昭和十四年四月一日  |                              |

図2 経歴（及川恵美子氏 提供）

1933（昭和8）年12月3日消印の妻・豊からの書簡（資料1に文面を抜粋）によると、「お別れしてから今日で丁度一ヶ月」とあり、帰郷した日が、1933（昭和8）年11月2日頃であることが確認できる。東京に帰る日を夫に尋ねている文面により、当初は一時的な帰郷の予定であったことが推察される。帰郷の理由は、明確に示されていない。しかし、機を郷里に送ったことが書かれていることにより、機織りが理由の一つであったと考えられる。当時の十二箇村では、緬羊飼育と羊毛加工が農家に普及していた<sup>8)</sup>。及川全三は、織子を求めて帰郷したのではないかと考えられる。また、経歴によると帰郷後2～3年で議員職に就いていることにより、農村の振興や改善に意欲をもっていたことも帰郷の理由の一つと考えられる。1933（昭和8）頃は、1930（昭和5）年からはじまった昭和恐慌、冷害による大凶作などで農村が疲弊していた時代である。1934（昭和9）年には昭和三陸津波で漁村も甚大な被害を受け、政府は農村漁村を救済する方策を打ち出し副業を推奨したという。時代は変わるが、及川全三の農村復興に対する姿勢について、野呂氏は次のように語った。

「農村の人たちに農業改良のようなことを教えて、村を何とか上手くいくようにしようとする気持ちが強かったんだと思います。青年団の人たちと一緒に、今でいう村おこしのようなものをやろうとされていたようでした。村に対する大変熱い気持ちがあったと思うんです、織物だけじゃなくてね。教育者ですからね。」

図2の団体歴は、このような農村振興に尽くした一面といえる。ただし、及川全三のホームスパンが、農村振興に結びついたものであったかという点については、さらに調査が必要である。今回の調査では、師事した弟子が盛岡や盛岡近郊、関東、近畿の出身であった。これは及

川全三が、全国的にホームスパンで名を馳せていたことの表れである。最初の弟子の福田ハレは1943（昭和18）年頃以降であったことにより、少なくとも1943（昭和18）年以降においては、ホームスパンと農村振興との直接的な結びつきが認められない。1943（昭和18）年以前における農村振興との関係は、本調査では判明せず、今後の課題である。

図2の職歴には、学校関係の教育歴が記載されている。1955（昭和30）年から12年間の非常勤講師を務めた『三島学園女子短期大学』、『三島学園女子大学』は、現在の宮城県仙台市にある『東北生活文化大学短期大学部』、『東北生活文化大学』の前身である。『向中野学園高等学校』は約半年の短期間であった。しかし、図2の職歴に記載されていないが、『向中野学園高等学校』の前身である『盛岡生活学校』において染色工芸を長い間教えていたと、高橋氏と野呂氏が証言している。高橋氏は、毎週金曜日に『盛岡生活学校』で及川全三が染色を教え、福田ハレが織りを教えていたと話している。野呂氏は、1957（昭和32）年に内弟子に入るとき、一人ではかわいそうだと及川全三の配慮により、『盛岡生活学校』の教え子2人と一緒に内弟子になったという。また、野呂氏は、次のようにも話している。

「先生が力を入れられたのは、三島学園より盛岡生活学校の方ですね。先生は、子供たちに工芸というものを教えたい、自分の本当の気持ちを表現させたいと言って、染めを担当していました。また生徒さんたちが、いいもの作ってらしたんです。型染めのやり方などは、芹沢銈介さんの影響できっちと教えていました。先生は絵が上手いんです。だから型もしっかりやってらっしゃいました。いい絵、いい図案を描いて染めてらっしゃいましたね。先生絵が好きなんです。その後、盛岡生活学校が高等学校に移ったんです。途端に講義の時間がなくなったので、“もう俺はいやだ。1時間か2時間でそんなもん教えられない”と言ってやめられたんですけどね。」

これらの証言から、及川全三は、1954（昭和29）年以前より『盛岡生活学校』で染色工芸を指導していたことが確認された。

#### 4. ホームスパンに取り組んだ契機

及川全三がホームスパンに取り組む契機については、晩年の1973（昭和48）年12月11日に開催された『及川全三を囲む会』で、往事を語る内容から知ることができる。資料2は、掲載文<sup>6)</sup>を転記したもので、関係箇所の下線を付けた。

柳宗悦から「工芸をやれといわれ」とあるように、柳宗悦からの勧めが染織工芸の道に進む契機であったことが確認できる。その上、綿や絹ではなく、羊毛いわゆるホームスパンに取り組む契機についても「植物染でないとホームスパンといわないわけですが、英国にも染植物がなくなったからやれといわれ」と話し、ホームスパンの本場であるイギリスを背景にしての柳宗悦の勧めであっ

（略）ハタはまだ届きませんでせうか それとも届いて織方なさってるでせうか  
お別れしてから今日で丁度一ヶ月 過ぎてしまえば早いようなもの、この一ヶ月は随分長いように思はれました。お仕事の御様子はまだまだお帰りの事出来ませんやうでせうか。十日頃迄には如何なやうでせうか。安俵の方々よく熱心にやうて下さる山、嬉しく思ひます。アナタ御一人でそれ迄になさるには随分苦勞なさいました事でせう。どんなにお疲の事かと心配して居ります。  
（略）私は変わりなく働いて居りますから、安心下さいませ。  
（略）お送り下さいました四種類全部染めどもよい色に染まりました  
（略）御帰京の日を楽しみにお待ちしております。お寒さの折柄御大切に かしこ  
二日夜十一時五十五分

資料1 書簡（東和ふるさと歴史資料館 所蔵）より抜粋

たことが確認できる。また、文中の「実は羊毛の植物染は柳さんに騙されたのです。」というくだりは、柳との親交が、ジョークを交えて話すほど深いことを表している。

一方、及川全三がホームスパンに取り組む契機については、従来から資料3①～⑤に示したような記述がみられる。④は、出典が⑤であることを明記していたが、①～③の中には雑誌記事や、伝聞した内容とするものもあり、特

に明記されていない。しかし、「梅原」や「乙子」が共通して見出されることにより、⑤が原典、あるいは⑤の著者である梅原五郎の関係者等の証言が根拠となつたのではないかと推察される。

⑤は、1931（昭和6）年頃の事柄を述べている。ここで、1931（昭和6）年頃に、及川全三がホームスパンを既に知っていたかどうか、という点を検討したい。

私は元々学校の教員として、東京に来て慶応の幼稚園という、幼稚園というのには幼稚園ではなく、慶応義塾の小学校ですが、幼稚園もない頃福沢先生が作られた学校です。その幼稚園で教員をしていて、いろいろよいことをしたのです。子供の作文、綴方ですね、をやったり、図画の先生がいるのに岸田劉生や走泥社の人を、劉生はこれがないので河野通勢などを講師にたのんだりしたもんだから塾の人の機嫌をそこね、一年間休職して何処か他に行けということになりました。そうしたら吉田小五郎さんが、ぶらぶらしていることはないから、柳宗悦という人が民芸運動を始めたから参加しないかといわれました。当時京都におられましたので出掛けてお会いしたわけです。そしたら工芸をやれといわれ、絹や木綿を手掛けたり、羊毛を始めたわけです。まったく先生もなく一人で自分流にやっただけで、染に引掛かり織まで行かないうちに日が暮れたようなものでした。実は羊毛の植物染は柳さんに騙されたのです。植物染でないとホームスパンではないといわれ、今もやっているわけです。しかし今は回顧して生きているうちに書いておきたいと思っている。藍は藍建てでは染まらない。毛は煮なければ染まらない。毛はアルカリを嫌うので藍建ては出来ない。他の色は木の皮を煎じ茶だけ、植物染を書いた本がないので何年も何年も七輪で鍋で試験した。五年もかかり貧乏もしました。山漆の乾燥したものやほとんど自分で開発して色を出したわけです。藍の発酵、山桃（しづき）は東北にないので京都から。一番調法したのは山漆。発酵化学を見ると蛋白質で植物によって発酵の仕方が違う。そうしてホームスパンの染料を作り今では不自由ないようになった。植物染料の色素は一種類でなく、二、三種類入っているのです。毛を染めるのは、一辺で濃くしなければならぬので苦労でした。

#### 資料2 『及川全三を囲む会』において

- ① 東京では郷里を共にする梅原五郎宅へ下宿していたが、彼へ郷里に住む母親の乙子から送られてくるホームスパンに魅せられて、これに生涯を懸けようと決心したとの話がある。<sup>1)</sup> 2007年
- ② 及川全三は東和町出身で岩手師範学校を卒業後、東京の梅原五郎の兄宅に教員として下宿しているとき、乙子のホームスパンと出会いその美しさに魅了され郷里の東和町に帰り、ホームスパン作家となった。<sup>2)</sup> 2002年
- ③ 及川氏は明治25年に東和町に生まれ、盛岡師範学校を卒業後東京で教諭をしていますが、昭和6年頃、東京杉並の梅原家に同居していた折り、岩手から送られてきたホームスパン服地を見て非常に感激したということが伝えられています。これが、ホームスパンとの最初の出会いだとされていますが、その後自分で織物を製作したいと決心をし（この当たりの経緯についてはよく分かっていません）、家族を東京に残したまま単身、東和町に移ってホームスパンの研究を開始します。<sup>4)</sup> 1996年
- ④ ホームスパン作家及川全三は梅原真菅の学生時代の友人であった。昭和6年当時、東京杉並の梅原宅に同居していた及川は、岩手から送られてきたホームスパン服地をみて、これに大きな関心を示したのである。及川と梅原は、一度、ホームスパンの事業化を検討している。しかしこれは、織物として独創性にとむホームスパンを農民の手にまかせておけないという立場をとる及川と、それに同意しない梅原の意見が噛みあわなかったこともあって実現にいたらなかった。<sup>7)</sup> 1988年
- ⑤ ホームスパン作家の及川全三氏は真菅の学校時代の友人です。昭和六年頃、東京杉並在住の兄宅に同居されていて、岩手の父から送られて来るホームスパン洋服地をみて非常に関心をもちました。初めは兄と協同でホームスパン製造を事業化しようという計画であったのが、都合で独自に始められたのでした。ホームスパンが織物して大変創作性に富むものであるのを見て、農民の手にまかせておけなかったからかもしれません。<sup>8)</sup> 1977年

#### 資料3 取り組みの契機についての諸説

資料2に示された「吉田小五郎さんが、ぶらぶらしていることはないから、柳宗悦という人が民芸運動を始めたから参加しないか」といわれました。」という慶応幼稚園教員の吉田小五郎からの誘いは、一年間の休職中のことを気づかされたものであり、柳宗悦との出会いは、休職あるいは辞職の後、それほど年月の経たない時期と考えられる。柳宗悦は、関東大震災の影響で1924（大正13）年4月より京都に移り住んでいるが、1929（昭和4）年4月～1930（昭和5）年7月は海外である<sup>9）</sup>ことを考慮すると、柳宗悦にはじめて会った時期は、1927（昭和2）年4月～1929（昭和4）年4月の間ではないかと考えられる。また、エセル・メレは、1926（大正15）年と1928（昭和3）年に日本で展覧会を行っている<sup>10）</sup>。これらを照合すると、1931（昭和6）年頃の及川全三は、柳宗悦を通しエセル・メレのホームスパンを見、既に知っていた可能性が十分にある。

ホームスパンに取り組む契機について、高橋氏は、「（全三が）自分のコートを作りたくて売っている所かどこかに行ったならば、その生地が自分の生まれた隣村の人が織ったものだとか、こういう仕事をやりたいと思って帰って来たんですって。」と語った。及川全三から聞いたかどうかを尋ねたところ、及川全三ではなく、福田ハレから聞いたということであった。

野呂氏は、取り組む契機について次のように話した。

「名前は、吉田小五郎さんだったと思います。慶応義塾幼稚園のときの同僚で、後の方で幼稚園の舎長もされた方です。その方の影響で柳宗悦とも交流があって、そこで、イギリスのメレという方のホームスパンも見せられたんですね。それと、岩手の郷里の方でも梅原さんたちがやっている仕事があるということが、ちょっと結びついていったんです。幼稚園で6年間教えて、また同じことするのは嫌になったんで、郷里に帰ったんだってことをおっしゃったことがあります。」野呂氏は、及川全三から聞いていたことが確認された。

野呂氏の証言を照らし合わせると、⑤に示された「非常に関心をもたれました」は、「ホームスパンとの最初の出会」や「美しさに魅了され」という意味ではなく、柳宗悦から勧められたホームスパンが、郷里でも作られていることを知って刺激を受けたという意味ではないかと考えられる。及川全三が、民芸運動に共鳴し、既にエセル・メレのホームスパンを知っていたと考えるならば、郷里で作られていたホームスパンを目にしたとき、これを工芸品にしたいという気持ちを強く抱いたのではないかと考えられる。

⑤では、梅原が及川全三のことを「ホームスパンが織物として大変創作性に富むものであるのを見て、農民の手にまかせておけなかったかもしれません。」と推測している。しかし、高橋氏は、福田ハレや通いで来ている農家の女性から織りを習ったと証言している。梅原の推測のとおりであったとするならば、⑤の「農民の手にまかせておけなかった」とは、色彩やテキスタイルデザイン、風合い、いわゆる美しさの表現であったと考えられる。及川全三が1958（昭和33）年に寄稿した『岩手のホ

ームスパン』<sup>11）</sup>の中では、次のことが述べられている。

「政府のホームスパン奨励は、なぜ期待された実を結ばなかったか。一つには時勢でもあろうし、ほかにもいろいろの理由もあろう。しかし現にわれわれが見ていることであるが物としても物が出来なかつた。なぜ出来なかつたか。それは指導者が「工芸」を知らないからであつた。手仕事の場合、作り方だけでは物は出来ない。それを越えて、その先の指導をなし得なかつたのである。」

## 5. 人間性とホームスパン

資料2では、及川全三の興味深いエピソードも語られている。慶応幼稚園の教員時代に触れ、「図画の先生がいるのに岸田劉生や走泥社の人を、劉生はこれられないので河野通勢などを講師にたのんだ」というエピソードである。言うまでもなく岸田劉生は、白樺派の同人である。この言葉から、全三が岸田劉生に共鳴していたこと、図画の教育に妥協を許さなかったこと、学校の反感を買ってまでも信念を貫く人物であったことが認められる。まさに、及川全三の個性が垣間見られるエピソードである。

及川全三について、恵美子氏は「真っ直ぐ過ぎて、人とぶつかる」と語った。全三の兄・優曹は、回想録の中で子供の頃の性格について、「我が強くてかなり非妥協的であった。友達に對しても辞せず、氣も短いやうであった。」と記している。

高橋氏に及川全三について尋ねると、自分ら（高橋氏と一緒に内弟子に入った後藤利加）にはやさしかったという。様々な話を内弟子に聞かせ、その話を聞くことは楽しかったという。野呂氏は、及川全三について次のように語った。

「先生は一本気で武士のような感じの人でした。ずっと道元禪を勉強してらした方です。正法眼蔵をテキストにして話してくださいました。懐契という人が書いた随聞記が分かりやすいからと言って、その随聞記をずっと講義してくださいました。仏教の教えにすごく興味があられたのか、それをライフワークにしてらしたと思います。生き方っていうことですね。先生は、織物を通してそういう生き方を学ぶということ、私達に教えようとしていらしたのかと思います。そういう感じの方でした。ただ目先のテクニックだけを教えるような方ではなかったです。だから、面白かつたし、あれだけの仕事ができたとしますね。他の人と違うのはそこだと思います。それで柳宗悦を非常に尊敬されて、大切にされたんですよ。」

また、野呂氏に、厳しい先生であったかどうかを尋ねると、次のように話した。

「怖くありません。でも、来る人に対してはカーっと、怒ったりもしてらっしゃいました。それは、自分の意に合わないような人に対しては高飛車になったりしてらっしゃいましたね。いわゆる平凡なこととか、惰性で生きているようなことは嫌いだったんです。だから先生は、役場の人をあんまり好きじゃないんですよ。」

役人嫌いを野呂氏に再び確認すると、「センスが鈍いような人はあまり好きじゃなかった。先生はわりといらちな感じだったから。」と話した。

また、及川全三の最初の内弟子であった福田ハレは、『岩手の羊毛染め』<sup>12)</sup>を寄稿した中で、柳宗悦から及川全三に師事するようにすすめられたときのことに触れている。柳宗悦の言葉は、次のように書き記されていた。

「岩手県陸中の農村に及川全三と云う元慶応幼稚園の教師をした人で、よき眼識を持ち、きびしい性格だが、良心的な仕事をしている人が居る、そこにに行け」

この言葉は、柳宗悦が及川全三をどのようにみていたかを知ることができ興味深い。

及川全三は、きびしく一本気で妥協しないために人と衝突し、きびしく一本気で妥協しないからこそ工芸に専心したと考えられる。ホームスパンを工芸品に高めることができた背景には、柳宗悦という師、エセル・メレのホームスパンという手本に加え、きびしく一本気で妥協しない一途な性格、絵への親しみ、優れた眼識、仕事に対する良心、禅思想の信条、教育者気質等が深く関わったことが認められる。

## 6. 結び

本研究では、ホームスパンの美術的価値を高めた及川全三に焦点をあて、収集した資料や聞き取り証言等をもとに経歴を概観した上で、ホームスパンに取り組んだ契機や工芸に専心する人間性を検証した。その結果、次のことが確認された。

及川全三は、元々小学校教員であったが、吉田小五郎の紹介で民芸運動を起こした柳宗悦に会い、感化を受けた。ホームスパンに取り組んだきっかけは、柳宗悦よりイギリスの染織家エセル・メレのホームスパンを見せられ、染織工芸の道を勧められたことであった。この契機に関わる柳宗悦との出会いの時期は、資料に鑑みて慶応幼稚園を辞職した1927（昭和2）年から柳宗悦が海外へ赴く1929（昭和4）年の間と考えられた。

及川全三は1933（昭和8）年に帰郷したが、その理由は、緬羊飼育と羊毛加工が普及していた十二箇村の織子を求めていたためではないかと考えられた。また、帰郷後まもなく議員職に就いていることにより、農村を改善したいという気持ちがあったことも理由の一つではないかと考えられた。

及川全三は、きびしく一本気で妥協しない性格であったため人と衝突したが、それゆえ工芸に専心したとも考えられた。ホームスパンを工芸品に高めた要因には、柳宗悦という師、エセル・メレのホームスパンという手本に加え、きびしく一本気で妥協しない一途な性格、絵への親しみ、優れた眼識、仕事に対する良心、禅思想の信条、元来の教育者気質等があったと考えられた。

## 引用・参考文献

- 1) 工藤紘一：柳宗悦と岩手の民芸，岩手県立博物館研究報告第24号，pp.69-96，2007年
- 2) 湯口靖彦：岩手の手織りホームスパン，月刊染織α，No.261，pp.41-45，2002年
- 3) 東和町先人顕彰事業推進協議会：ホームスパン 及川全三，東和町先人顕彰誌 清流猿ヶ石，東和町教育委員会，pp.113-124，2005年
- 4) 佐々木陽：羊毛の利用方法Ⅲ－岩手県のホームスパン－，シープジャパン第18号，畜産技術協会，pp.14-16，1996年
- 5) 及川全三：羊毛本染実験覚書，岩手県教育會出版部，1936年
- 6) 東京民芸協会：及川全三を囲む会，民芸手帖49・2月号，189号，pp.44-45，1974年
- 7) 阿部和夫：ホームスパン生産の成立と発展－岩手県ホームスパン生産史ノート（上）－，盛岡一高研究紀要「自彊」第6号，1988年3月pp.1～13
- 8) 梅原五郎：岩手ホームスパンの歩み，染織と生活No.19，pp.34～37，1977年
- 9) 柳宗悦：柳宗悦全集著者篇第二十二卷下，筑摩書房，pp.252-254，1992年
- 10) 寺村祐子：植物染色，解説 メレ夫人とニッポン，慶応義塾大学出版社，pp.99～106，2004年
- 11) 及川全三：岩手のホームスパン，民芸 第六十八号 八月号，日本民芸協会，pp.38～39，1958年
- 12) 福田ハレ子：岩手の羊毛染め，染織と生活No.19，pp.17～24，1977年

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただきました及川恵美子氏、野呂淑子氏、高橋マサ子氏に心から感謝いたします。資料収集では、東和ふるさと歴史資料館の橋本征也氏、盛岡市先人記念館の田崎農巳氏にご高配をいただきました。厚く御礼申し上げます。また、昭和初期の資料の解釈にあたり、盛岡短期大学部国際文化学科の菅田慶信先生、松本博明先生にご指導いただきました。深く感謝いたします。